

平成 22 年 6 月 15 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520583

研究課題名（和文） 日本古代における天皇権威の形成・変容と東アジア世界

研究課題名（英文） Formation and Transformation of the Tenno's Authority in Ancient Japan, and The East Asian World

研究代表者

堀 裕 (HORI YUTAKA)

大阪樟蔭女子大学・学芸学部・准教授

研究者番号：50310769

研究成果の概要（和文）： 7～11世紀における天皇権威の形成・変容を、東アジア世界との交流を視野に位置づけた。天皇の祖先祭祀は、大陸で祖先を祀る宗廟祭祀等の影響を受け、7世紀後半にアマテラスへの祭祀や山陵の創出として本格的に形成される。その後、香椎廟や八幡神等の祖先神の分出や、伊勢神宮と山陵の並立などの現象がみられた。10世紀末には、山陵の宗廟としての機能は衰退し、その後、伊勢神宮と八幡宮が宗廟を名乗る。また、東大寺大仏も天皇権威の分身であり、その変化は上記変遷と関わる点を明らかにした。

研究成果の概要（英文）： This research located formation and transformation of the Tenno's authority from the 7th century to the 11th century. In that case, it contemplates the exchange with the east Asian world. Emperor's ancestor festa receives the influence of a continental ancestral mausoleum "Soubyou" festa, and is formed in full scale as a festa to the Emperor's ancestor god "Amaterasu" and Emperor's ancestor mausoleum "Sanryo" in the latter half of the 7th century. Afterwards, the ancestor gods whose names are "Kashiibyou" and the Hachiman god divided from ancestor gods. Ise Jingu Shrine and the Emperor's ancestor mausoleum "Sanryo" became concomitant. The function as the ancestral mausoleum "Soubyou" in "Sanryo" declined at the 10th end of the century. On the other hand, Ise Jingu Shrine and the Hachimangu shrine come to be called an ancestral mausoleum "Soubyou". Moreover, the Todaiji Temple great image of buddha was an one's double of the emperor authority, and the change is related to the change previously described.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：日本古代史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：日本史・東洋史・宗教学・仏教学・日本古代史・東大寺・宗廟

## 1. 研究開始当初の背景

これまで天皇権威をめぐる研究を進めてきたが、今回の研究課題の開始は、とくに、堀裕「天皇の死の歴史的 position—「如在の儀」を中心に—」(『史林』第八一卷一号、1998年)と、同「平安初期の天皇権威と国忌」(『史林』第八七巻六号、2004年)の二つの論文が、おもな契機となっている。これらの研究を通じて、いくつか研究史上の課題があることに思いいたったのである。

(1) 堀裕「天皇の死の歴史的 position—「如在の儀」を中心に—」(前掲)や同「平安初期の天皇権威と国忌」(前掲)では、天皇の喪葬儀礼や国忌の検討により、9世紀の画期だけでなく、11世紀におけるより一層大きな画期を明確にした。それゆえ、天皇権威の研究においては、少なくとも7世紀から11世紀までの長期的展望が必要であると考えた。たとえば、「天皇霊」は、7・8世紀の倭・日本の史料に現れる。これまでの研究では、当該期の首長の要素を示す一根拠とされたり、9世紀との不連続を示す史料とされたりしている。しかし、祖先霊としての「天皇霊」の役割は、少なくとも10世紀まで継続するのではないかと考えた。また、平安前期の文化は「唐風化」と表現され、天皇の場合、中国的皇帝権威への接近と評価される。ここでいう「唐風化」の内実は、多くの場合礼制や、王位の抽象化といった現象を指す。しかし、平安中期以降への展望を欠いている点に、やはり大きな問題がある。

(2) 堀裕「平安初期の天皇権威と国忌」(前掲)では、日唐の国忌の比較が、これまでの研究では多く『唐六典』などとの間で行なわれていたが、現実には唐朝でも国忌制度に変遷があり、その変遷の影響があった。それゆえ、これまで桓武朝における日本の特異な現象とみられていた点が、実は宝亀の遣唐使によってもたらされた情報をもとにした唐制度の新たな導入に他ならない点を明らかにした。この点から、多くの日唐比較律令論に代表されるように、従来の制度史研究は、唐の法典との比較が中心であり、唐の諸制度の変化や、その変化の日本への影響が十分に考慮に入れられていないと考えた。「天皇霊」など「王権」に関する諸制度に限ってみても、とくに集中する律令制度成立期に関する研究を除けば、8～11世紀までの天皇を東アジアの中で位置づける研究はほとんどないのである。

## 2. 研究の目的

7世紀から11世紀を中心に、天皇権威の形成・変容を、国内政治と、唐朝など東アジア世界の変動・交流などの相互関係から位置づけることを目的とする。とくに、これまでの研究とは異なる次の三つの点を明確にすることとなる。

(1) 大陸の影響や対外関係史を踏まえることで、倭や日本の「一国史」的な「王権論」の枠を越えること

(2) 唐の制度的な変化に着目することで、静態的な日唐比較制度研究を乗り越えること

(3) 天皇権威の形成・展開や、その大陸の影響について、研究が集中しがちな律令制度の形成期にとどまらず、少なくとも7世紀から11世紀までの時間幅で考えること

## 3. 研究の方法

おもな検討の材料を「天皇霊」に関わる、山陵・瑞祥・仏教的霊などの諸制度とする。天皇に関わる諸制度のなかでも、古代天皇の宗教的権威の本質ともいえる「天皇霊」は、検討すべきもっとも重要なテーマの一つと考えたからである。そこで、下記三点の検討を通じて、「天皇霊」の役割が、東アジア世界の影響を視野に、7世紀から11世紀にかけての変遷を跡付ける。その結果、「天皇霊」が、東アジア世界の文化的背景の下に形成・変容したものである点が明らかになるとともに、当該期の特色が明らかになると考えられる。

(1) 宗廟制度との関係に留意しつつ、「天皇霊」を体現する山陵制度の成立と展開を明確にする。

① 日本律令が、唐律令の山陵を一部継受しながら、宗廟の語句を削除した点は周知のことであり、一般に日本の固有性が強調される。また一方で、「天皇霊」や山陵制度が7世紀末に成立するとの指摘があるが、天皇の祖先霊の変質は、唐や新羅などの影響を受けたと推測される。とくに、外交使節等による「貢物」の山陵への献上などは、唐の宗廟の機能と同様である。つまり、関連する諸制度の検討を通して、アジア諸国の王の祖先祭祀を比較する方法が、日本の祖先祭祀を考える時に有効と考えられる。

② 唐朝の宗教政策は、儒仏道の三教共存を基本としつつも、仏教を極端に重視したり、道教への比重を高めていったりと、それぞれ時期によって異なる。こうした動向は、アジア諸国との関係に影響を与えていた。日本にお

いては、宝亀の遣唐使派遣とそれに付随する唐使の迎送に一つの画期がある。安史の乱による唐の混乱と唐からの道教伝導に対抗し、唐からの相対的な自立を強調するためにも、儒教的な祭祀を実施するとともに、仏教を明確に天皇の下に位置づける方向へと転換したと考えられる。宝亀 10 年以降における仏教統制の強化や郊祀の実施などいずれも深く関連する政策であり、国忌と連動して山陵政策も唐の七廟制の影響を受けている（堀裕「平安初期の天皇権威と国忌」前掲）。9 世紀には、これまでも指摘される山陵を宗廟に擬す言説や、即位後の謁廟儀礼になぞらえた即位奉幣の事例等が、上記のような東アジア世界の中で位置付ける必要がある。

③11 世紀以降、原則新置を停止した山陵の機能は、変質したと考えられる。他方で、11・12 世紀になると、すでに指摘されるように宗廟に擬すべき位置も伊勢神宮や八幡宮にとって代わられる。この点を踏まえるならば、山陵が宗廟とされなくなる時期を明らかにする必要がある。たとえば、8 世紀以来、山陵に準じて神功皇后等を祀る香椎廟が、11 世紀に香椎宮の呼称に変化する点なども関連すると考えられる。

(2) 瑞祥の出現をとりあげ、平安期の山陵の機能の変化について論じる。なお、瑞祥の発生の思想的背景となるのは、中国の天人相関思想によるが、日本では天神地祇や「天皇霊」も発生の主体となる。

①先にも確認したように、そもそも 10 世紀初等にも山陵が主体となって瑞祥が出現したことが確認されることは、その時期まで「天皇霊」がなお存続していた証拠と考えられる。

②9 世紀には年号御願寺が存在し、そのうちの一部は山陵と一体の寺院であった。ところで、その年号はいずれも瑞祥によって改元されたものであり、当該天皇の治世を寿ぎ、天皇を表象する役割があったと考えられる。なお、年号御願寺では、天皇の誕生日に特別に僧侶の得度が許された。唐においても 8 世紀後半には皇帝の誕生日に法会が開催され始めており、その直接的影響を受けたと考えられる。この現象は、唐・日本のいずれにおいても仏教への極端な傾倒を示す現象とはいえず、仏教が王の身边にはあっても統制下におかれていたと考えられる。

③11 世紀には、瑞祥の出現そのものが減少する点を明らかにする。同時に年号においても、瑞祥による改元が 10 世紀半を境におこなわれなくなることで、年号御願寺も、9 世紀を最後に現れなくなりいわゆる四円寺等へ転じていく。これら一連の現象が、東アジア世界の中でも瑞祥の意義が低下していることと連動している点を明らかにする。

(3) 仏教的霊と「天皇霊」の関係について、国家の仏教法会において中心的な役割を果たす盧舎那仏を中心に検討する。8 世紀には、「天皇霊」と並立する「盧舎那仏の霊」が史料上に現れる。則天武后等の政策になぞらえた仏教への極端な傾斜は、唐仏教の積極的導入を促したが、その権威のあり方は「天皇霊」になぞらえる形で、日本定着の方法をとったと考えられる。盧舎那仏が、宮中正月金光明最勝会の本尊として、大極殿の高御座にすえられるようになったことが、「盧舎那仏の霊」出現の一要因と考えられる。また、その前身形態として東大寺の大仏が存在したことは間違いない。たとえば東大寺大仏の毎日の仏供には、天皇と同じ御田の料物が宛てられた点も関係すると考えられる。その後、宮中金光明最勝会については、10 世紀に縮小し、御田による大仏供に関しても、御田に代わって大仏供白米免田が形成される 10 世紀後半以降には変容する。ここに、「天皇霊」になぞらえて創出された仏教的霊は、「天皇霊」の消失と並行して解体・変質すると想定した。

#### 4. 研究成果

(1) 7 世紀から 9 世紀初頭を中心にした研究成果を掲げる。それに先立って、研究方法に積極的な修正を加えることとなったことを記しておかなければならない。研究をすすめるに従い、天皇の宗教的権威解明の素材として、天皇の祖先祭祀をとりあげるならば、山陵を検討するだけでは不十分ではないかと考えるにいたった。たとえば、唐や新羅などの王家の祖先祭祀と比較すると、倭・日本のアマテラスなどにも、宗廟と類似する機能があり、そもそも「皇祖」とも呼ばれる存在を無視することができないのである。そこで、山陵と伊勢神宮、さらには同じく天皇の祖先を祀ったと考えられる香椎廟や八幡神を天皇の祖先祭祀の問題として一括し、その相互関係と歴史的展開を解明する必要があると考えたのである。

①まず、唐の宗廟の機能を『大唐開元礼』や新旧両唐書、『資治通鑑』、『冊府元龜』などから抽出した。とくに、相互に比較しやすい臨時祭祀に重点をおいた。その結果、戦争や内乱時の皇帝一族の守護、皇帝一族の公的地位の承認、祥瑞出現の報告、祈雨・止雨の祈祷、皇帝巡狩の報告などがあげられる。総じていえば、皇帝一族、延いては王朝の守護を行う機能があるといえる。なお、新羅など朝鮮の宗廟についても検討を行ったが、唐の宗廟の機能と基本的には変わらないことが確認できた。

②倭・日本においては、記紀のなかのアマテラスは、「献俘」の対象となったほか、軍神としての機能があった。また、7 世紀末以降、

「蕃国」からの「貢物」を伊勢神宮や山陵に献上することもある。これらは、唐の宗廟の機能と共通する面がある。

③倭・日本の軍神としての機能は、アマテラスが一貫して担う一方で、山陵は当初担わなかったと考えられる。ところが、8世紀前半になると、本来山陵として祀るべき天皇の祖先が、八幡神や香椎廟として祀られはじめ、軍神としての役割を担いはじめる。その契機は、隼人との戦争や対外関係の緊張にあるといわれる。それは、神功皇后伝説を背景として、天皇の祖先神を軍神として分出したとも評価できる。その祭祀の場所も、前線たる西海道の北部であったのも特色といえる。

④即位儀礼に関連して、当初山陵が関与していた記述があるが、天平宝字年間より伊勢神宮が積極的に関与を初める。この点は、唐の開元年間に老子廟が一層重視されたという情報を遣唐使から得たためではないかと考える。その後、桓武朝以降になると、即位儀礼に限らず、遷都や征夷などの報告において、伊勢神宮と山陵が並立するようになる。この形態が10世紀まで継続すると考えられる。

(2)9世紀から11世紀を中心にした研究成果を掲げる。

①年号は祥瑞出現を理由に改元されることがある。しかし、祥瑞改元は9世紀を最後にみられなくなる。また、祥瑞出現の報告を山陵に行くことも10世紀初頭を最後になくなる。祥瑞の役割、ひいては祥瑞を通して山陵の役割は、この時期までに概ね衰退したといつてよいのだと考えられる。

②年号を付した天皇御願の寺院、いわゆる年号御願寺は、延暦寺にはじまり仁和寺を最後とする。これら年号御願寺の年号は、すべて祥瑞改元の年号を採用している。最初のやや特殊な例である延暦寺を除けば、天皇を早くから守護してきた僧侶の関わる貞観寺と元慶寺、天皇在位中に天皇として没した天皇の墓と関わる嘉祥寺と天安寺、仁和寺に分けることができる。つまり、祥瑞改元による年号とは、「ただ人」となった太上天皇はもはや埒外であり）天皇を祝福する記号なのである。そして、①と連動して、9世紀末には年号御願寺が現われなくなる。

③山陵の機能の変化について臨時奉幣に注目して分析した。臨時奉幣のなかには、当時の人々が、山陵の示した怪異や祟への対応として行われる場合があり、これは比較的後世まで継承されていく。しかし、「鎮護国家」のためとでもいふべき、政変や災害、対外関係の緊張などで行われる臨時奉幣については、長徳の変の時に行われた10世紀末を最後に見られなくなる。また、皇位継承に関して行われる臨時奉幣についても変化が見られる。天皇の即位時には11世紀初頭を境に、

即位前に行われていたものが、即位後に行われるように変化する。伊勢神宮への臨時奉幣が一貫して即位前であることを考えれば、その機能が低下したと評価することが可能である。皇后立后時はより明確で、10世紀末に山陵への臨時奉幣はみられなくなり、以後八社奉幣のみが行われるようになる。

④つまり、10世紀を通じてみられた変化は、11世紀初までにおおむね変化を遂げたといえることができる。なかでも山陵機能の変化・衰退と入れ替わるようにして、11世紀前半より伊勢神宮や八幡神が宗廟と呼称されることが想起される。天皇の祖先祭祀の系譜の一つである山陵は、宗廟に擬えて7世紀後半に成立したが、10世紀末から11世紀初頭までにその役割を終えることとなったのである。山陵にねむる、かつて肉体をもっていた天皇の祖先たちが、国家の守護に当たる時代は終焉し、天皇の祖先神である伊勢神宮や八幡神など神格をもつ存在が国家の守護に当たる時代が到来したのである。

(3) 天皇権威の分身としての東大寺大仏に関する研究をすすめた。

①東大寺大仏に対して、国家から毎日の供養料として施される大仏供の財源は、これまで正税、もしくは元慶官田を起源にすると考えられてきた。けれども、検討の結果、天皇の食事を主な用途とする令制官田に由来することを明らかにした。その上で次の四点を論じている。

②東大寺大仏と天皇が、日常的な食材を同じくするような、密接な関係が浮かび上がった。宮と寺の系譜に位置づけることの可能な東大寺、および東大寺大仏は、その系譜の中でも一つの画期をなす存在であった。聖武天皇や光明皇后らの信仰に始まり、あくまで宮と寺、平城宮と東大寺の関係を維持しながら、国家の仏教政策の頂点に位置したのである。内裏から施される七種粥や、令制官田を割出す大仏供も、その中での象徴的な出来事の一つであったと考える。とくに令制官田が、天皇の地位とも密接に関わる財源であるため、その割出は天皇個人の帰依というにとどまらず、制度としての天皇の帰依に転じた。

③長岡京や平安京への遷都によっても、宮と寺との関係は、長岡京の「京下七寺」のうちのいくつかの寺院から、平安京の常住寺・聖神寺へ、また御願寺へと引き継がれていったと考えられる。とくに、常住寺・聖神寺や東寺講堂の諸像の場合は、内裏から直接仏供・仏聖供などが支給される形態をとっている。これらの財源が、令制官田であるかは明確ではない。

④国家財政から仏供・仏聖供が支出される他の御願寺は、9世紀半ばを境に、内蔵寮からの一時的支出がなされる場合もあるが、原則

諸国正税出挙等へと財源が変化していた。ここに、天皇の供御を割くという、より直接的な関係は失われている。令制官田そのものも9世紀に大きく変化しており、その位置づけの変貌と連動している可能性がある。

⑤このような変転の中で、東大寺大仏そのものは、南都諸大寺の首位としての地位を取り戻し、七大寺の中でも象徴的であれ中心の位置を保つことにもなったのである。平城宮と関連する東大寺という位置づけからの明確な脱皮ということも可能である。

⑥以上のように、東大寺、あるいは東大寺大仏は、9世紀初頭を境に、天皇の食事の分割など天皇や宮との密接な関係から脱しつつ、かつ南都首位の寺院へと転成する。そして、その様は、天皇の権威の変化と連動していると考えられる。

(4) 国内外における研究の位置付けとそのインパクトとしては、次の四点が挙げられる。

①天皇の祖先祭祀の問題は、これまで山陵や伊勢神宮、香椎廟・八幡神など個々別々に論じられてきたが、その相互関係を分析した点はこれまでにない点であったと考える。それゆえ、今後の研究において、この点を踏まえることは、避けることができなくなったといえる。

②天皇の権威の変遷について、個々の局面の分析もちろん重要だが、今後の研究においては、少なくとも7世紀から11世紀までは視野に入れて論じなくてはならない点が明確になった。

③天皇権威の形成・展開に関して、7世紀だけではなく、その後の時期においても対外関係を意識して論じなくてはならない点が明らかになった。

④東大寺、または東大寺大仏に関して、これまでは、8世紀の「国家仏教」を代表する寺院・仏像としてア prioriにその権威を認めていた。しかし、天皇との具体的な関係の分析が必要であり、また8世紀だけでなく、9世紀以降における変貌も、天皇権威と関わることが明確となった。さらに、9世紀以降、南都首位の寺院であることの意義について基礎的研究ともなったのである。

(5) 研究の今後の展望

①伊勢神宮や八幡神など天皇の祖先祭祀の具体的な分析が、9世紀まででとどまっている。この点について、11世紀に宗廟と呼ばれるようになるまでの、9世紀から11世紀の研究が必要である。

②今回は制度の大枠を明らかにすることが必要であったため論じられなかったが、個々の祥瑞出現については、なお検討が必要であったと考えられる。祥瑞の特色を踏まえた、その歴史的意義の分析は、大陸の影響や変化

の意義を一層明確にしたに違いない。

③大陸における山陵や宗廟などの制度的変遷をより具体的に明らかにする必要がある。この点は、中国や朝鮮の研究でもなお十分に進められていない分野である。その様子がより明確になることで、倭・日本の変遷の意味ももっと明確になると考えられる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ①堀裕、東大寺大仏と宮一大仏供起源考一、日本史研究、査読有、569号、2010、1-24
- ②堀裕、平安期の御願寺と天皇一九・十世紀を中心に一、史林、査読有、第91巻1号、2008、67-100

[学会発表] (計1件)

- ①堀裕、宮と寺一東大寺大仏供起源考一、日本史研究会古代史部会・中世史部会(合同部会)、2008年9月9日、機関紙会館

[図書] (計1件)

- ①堀裕、七～九世紀の天皇の祖先祭祀一山陵・神宮・廟の関係史一、栄原永遠男ほか編『律令国家史論集』所収、塙書房、2010、207-225

[その他]

ホームページ等

○アウトリーチ活動(計2件)

- ①堀裕、東アジアのなかの女性天皇、はびきの市民大学、2009年11月21日、大阪府羽曳野市リックはびきの
- ②堀裕、古代の祥瑞思想と讃良郡一白山鶏と龍一、大東市だいつ塾、2008年11月10日、大阪府大東市生涯学習センター

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀 裕 (HORI YUTAKA)

大阪樟蔭女子大学・学芸学部・准教授

研究者番号：50310769

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：